FRONT
OF
VIEW

旅にて日本の変化を考える

第一生命経済研究所　代表取締役社長
石嶺 幸男

最近、地方を旅して目につくことの一つに、古い街並みや建物の復興、保存が進んでいることがあげられる。

以前は公共の建物（市役所、県庁、ホール、美術館、etc）の新築が目立っていたのだが、少し変わってきているのかなと感じる。

それらの場所へ行くとボランティアの人達がいろいろと解説をしてくれる。「地域の歴史に果たした役割」、「○○の小説の舞台となったところ」、「能や歌舞伎の名場面はこの場所での出来事」等々楽しませてくれる。音楽会が開かれたりもしている。

旅館なども変わってきているのではないか。近代建築一本槍でなく、昔の雰囲気を大切にするような建物が増えてきている。サービスなども随分と気を使っているようで、各ホテル、旅館の工夫が目立つ。テレビでよく「○○おかみ奮戦記」のようなことをやっているが、以前はそこで紹介された旅館が飛び抜けた存在だったのが、今は皆あたり前のようになってきているようだ。

例えば旅行代理店へ行くと泊まり客の評判がずらっと並んで一目瞭然比較されるのだから、競って良くする力が働かざるを得ない。地元でもいかに競争しながら地区全体の魅力を高めていこうか努力が続けられている。

日本の観光収支は大幅な赤字である。日本から海外への旅行者は1,620万人に対し、海外からの訪日客は477万人（2001年実績）。これだけアンバランスな国は他に例がない。国土交通省は2007年までに訪日客を倍増の1,000万人に近づけるべくキャンペーンをするという。

日本には豊かな自然があり、観光資源としての魅力はあるのに訪日客は少ないばかりでなく日本人も国内より海外を選ぶ。いろいろ理由はあるがコストの問題が大きいと思われる。

しかし、これについても「食事を別料金」体系にするところも出てきているなどいろいろ工夫されている。またバブル期に建てられコスト高で苦戦を余儀なく

されていた施設が安価で譲渡され、経営が入れ変わって新たなコスト体系のもとでスタートという形が急速に進んでいるようで、全体としてはリーズナブルな方向にむかっていると思う。

ところで最近の客の中で目立つのは親、子、孫、三代の一家そろってというグループである。

そう言えば都内のホテル、レストランでも孫の誕生会等をこのグループでというのがけっこう目立っている。経費は親持ちが多いと想像される。また60歳前後以降の同窓会等のグループも目立つそうである。いずれにしろ、これからは金を持っているところをいかにターゲットにして消費を拡大させていくかの競争ということだろう。

それからもう一つ気になることは、ホール、美術館を含め、これら施設の維持のためのコストがどうなっているかということだ。美術館の中には経営難で資産処分を余儀なくされているところが多々出てきているようだ。私営から公営へ移るところも多いようだが、ボランティアを生かすとか寄付*がもっと考えられてよいのではないか。

さて今月号のレポートは先月号に続く荒川論文「わが国家計貯蓄の現状と方向性について（下）」とノーツでは的場副主任研究員の「アウトリーチ活動の意義・課題についての一考察」を紹介している。高齢化社会やボランティア活動について考えをめぐらす一助となる筈である。

（* 先日京都で文化財保護のための17億円の寄付が話題となった。）